

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：37201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26380975

研究課題名（和文）被虐待児の箱庭作品、コラージュ作品の査定の合理性に関する比較研究

研究課題名（英文）Comparing the Rationality of the Assessments of Collage Art and Sand Play Art done by Victims of Child Abuse

研究代表者

西村 喜文（NISHIMURA, YOSHIFUMI）

西九州大学・子ども学部・教授（移行）

研究者番号：40341549

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：箱庭作品においては、箱庭印象評定尺度を用いて箱庭療法実践者と箱庭療法初心者による評価特徴を明らかにし、箱庭療法実践者と箱庭療法初心者における「箱庭の見方」の相互性について検討した。コラージュ作品においては、コラージュ印象評定尺度、判断軸を用いて、コラージュ療法実践者からの印象内容の特徴を把握し、初心者からの評価として「コラージュ・スコアリング・カテゴリー」を用いて評価内容の特徴を明らかにしコラージュ療法実践者と初心者の「コラージュの見方」の相互性について検討した。

研究成果の概要（英文）：This study used a scale for assessing the impressions of sand play in order to reveal the characteristics of the evaluations done by practitioners and novices of sand play therapy. Furthermore, it explored the reciprocity of the “viewpoints on sand play” held by both the novices and the practitioners. Additionally, this study used a scale for assessing the impressions of collages and the standards for making decisions in the art to discern the characteristics of a collage therapy practitioner’s impressions. It also examined the reciprocity of the “viewpoints on collages” held by both the novices and the practitioners of collage therapy by clarifying the evaluation content characteristics of the evaluations done by the novices using the collage scoring categories.

研究分野：社会学

キーワード：臨床心理学 コラージュ療法 箱庭療法

1. 研究開始当初の背景

心理療法人は、言葉を介するコミュニケーションが本質とされるが、被虐待児は、自分の心の中に刻まれた記憶をうまく表現することができず、そのため、表現を促す方法が求められる。箱庭療法、コラージュ療法の特徴をふまえての評価に関する基礎的研究や臨床的研究は、自分の気持ちを十分に表現することが乏しい被虐待児の理解と支援のためにも重要と考える。

2. 研究の目的

収集した箱庭作品、コラージュ作品を箱庭印象評定尺度、コラージュ印象評定尺度、判断軸、コラージュ・スコアリングカテゴリーを用いて評価し、査定の合理性について検証する。

3. 研究の方法

(1) 実施方法

コラージュ制作

コラージュ制作は、マガジン・ピクチャー・コラージュ法を用いて、3~4人程度のグループで行う。材料は、条件を整える意味から共通の雑誌2冊と、各年代の特徴をとらえることを狙い男女の代表的な雑誌2冊を用意する。台紙は、白色八つ切りの画用紙、裏側には、作成日、タイトル、年齢、性別を記入する欄を設ける。画用紙の設定は、制作時間、保存性、利便性を考慮し決定した。

箱庭制作

コラージュ実施後、時間を空け(24時間)箱庭制作を個別で行う。

箱庭療法用具一式は条件を整える意味から対象者全員共通の玩具を使用する予定である。制作時間は作品を作り終わるまでの時間とし、一人当たりの制作時間は30分を上限とする。

4. 研究成果

(1) コラージュ作品における評価の合理性 調査手続き

コラージュ・スコアリングカテゴリーを用いた評価は、コラージュ療法についての知識は有すが、臨床経験のない大学院生3名(以下初心者と略す)が評定を行う。印象評定尺度、判断軸の評価はコラージュ療法臨床経験がある臨床心理士3名(以下経験者と略す)が評価を行った。また、児童養護施設入所児の作品であることやその他の情報では明かさず、純粋に作品だけを見てもらい評価をお願いした。なお、コラージュ作品の研究および公開については、施設長及び児童に同意を得て研究を行っている。

コラージュ・スコアリングカテゴリーによる特徴

本研究では、児童養護施設入所児のコラージュ作品についてコラージュ・スコアリングカテゴリーを用いて、年齢(小学生、中学生、高校生) 入所年齢(乳幼児期、児童期、思春期) 在園年数(0~3年、4~7年、8年以上) ごとに比較検討しその特徴を明らかにした。

1) 年齢別

各カテゴリーでみると、【葛藤】($F(2,117) = 4.157, p < .05$)【後退】($F(2,117) = 3.129, p < .05$)で主効果が認められた。

多重比較で年齢別の検討を行ったところ【葛藤】に関しては、小学生と中学生(小学生 < 中学生, $p < .05$)の間で有意な差があり、小学生よりも中学生が葛藤や抑圧を現す作品を作る傾向が見られた。先行研究で報告されている中学生特有の情緒不安定の症状や状態を表していることがいえた。さらに【後退】に関しては小学生と高校生(小学生 < 高校生, $p < .05$)の間で有意な差があり、小学生よりも高校生が事態に関わることからの回避や後退傾向といった特徴のある作品を作ることがいえた。

2) 入所年齢別

各カテゴリー、下位項目において有意な差は認められなかった。

3) 在園年数別

各カテゴリーでみると、【対物】($F(2,117) = 5.446, p < .01$)で主効果が認められた。多重比較で入所年齢差の検討を行ったところ、

【対物】に関しては、0~3年在園群と4~7年在園群(0~3年<4~7年, $p < .05$)で有意な差があり、0~3年在園群よりも、4~7年在園群が対象・事象の欲動や感情に関する特徴のある作品を作ることが見られた。

下位項目で見ると、【対人】カテゴリーでは「情動」($\chi^2 = 8.46, df = 2, p < .05$)において在園年数別の出現率が異なることが分かり、残差分析で見ると「情動」を多く貼る傾向が8年以上在園群に見られた。【対物】カテゴリーでは「風景」($\chi^2 = 6.25, df = 2, p < .05$)において在園年数別の出現率が異なることが分かり、残差分析で見ると「風景」を多く貼る傾向が8年以上在園群見られ、一方「風景」を貼らない傾向が4~7年在園群に見られた。【葛藤】カテゴリーでは「文字挿入」($\chi^2 = 11.84, df = 2, p < .05$)において在園年数別の出現率が異なることが分かり、残差分析で見ると「文字挿入」を多く貼る傾向が4~7年在園群に見られ、一方「文字挿入」を貼らない傾向が0~3年在園群に見られた。

評価者の一致度に関する検討

1) コラージュ・スコアリングカテゴリーの一致度と割合の関連をみるために χ^2 検定を行ったところ、【対人】【対物】【表出】【葛藤】【後退】のすべてにおいて有意であった。残差分析でみると【対人】【対物】【葛藤】【後退】は「高い一致」が多い傾向が見られ、【表出】のみ「かなりの一致」が多い傾向が見られた。この結果より、コラージュ・スコアリングカテゴリーは評定者の経験など影響がなく、誰でも同じように得点化でき、簡便で客観的な体系化された解釈基準であることが示唆された。

2) 印象評定尺度の一致度について χ^2 検定を行ったところ、【安定性】【表出性】【創造

性】のすべてで有意であった。残差分析でみると【表出性】は「かなりの一致」が多い傾向が見られ、【安定性】【創造性】は「中程度の一致」が多い傾向が見られた。このことから、経験者の中でも臨床経験の差や、印象評定尺度の使用頻度によって見方にばらつきがでてしまうことが示唆された。

3) 判断軸の一致度について χ^2 検定を行ったところ、【判断軸】に有意な結果がみられた。残差分析でみると、「中程度の一致」が多い傾向が見られた。判断軸は対極の尺度になっており、判断が難しいことが予想される。また、経験者内での見方にばらつきがあったということは、経験者自身にも見方に幅があることがいえた。

まとめと今後の課題

本研究では児童養護施設入所児のコラージュ作品を、コラージュ・スコアリングカテゴリーを用いて特徴を明らかにし、3つの視点からコラージュ査定について検討することができた。

1) コラージュ・スコアリングカテゴリーを用いたコラージュ表現の基礎的研究

人間の出現や文字、風景など先行研究の結果と一致する項目もあれば、一致しない項目もみられた。その理由として、コラージュ・スコアリングカテゴリーには、従来の内容分析と同じ項目や一方で従来の内容分析では捉えることができない項目が含まれている。たとえば【対人】カテゴリーの「情動」や【対物】カテゴリーの「敵意」などに本研究において主効果が見られ、これらは感情について理解したい場合は有効な指標になると思われる。一方で、コラージュ・スコアリングカテゴリーは内容・形式分析と比較すると、項目数にも限られた下位項目しかなく、その面では従来の内容・形式分析の方がより詳しく作品の意味を受け取り、内面の理解につながることも示唆された。

2) 評価者の一致度に関する検討

次に評価者間の一致度についてコラージュ・スコアリングカテゴリーでは評価者間の一致度が高く、評定者の経験などは影響せず、誰でも同じように得点化でき、簡便で客観的な体系化された解釈基準であると推察された。このことは、臨床現場でも査定が求められた際にひとつの解釈の手掛かりとして利用することができると思われる。一方でコラージュ・スコアリングカテゴリーに比べると印象評定尺度、判断軸は一致度がやや低い結果になった。このことは、経験者の中でも臨床経験の差や尺度の使用頻度、さらにコラージュ制作の体験や作品を読み取る力によって見方に幅があることが示唆された。やはり、従来の印象評定尺度、判断軸は森谷（2012）が述べるように、評価の難しさが明らかになった結果でもあった。しかし、コラージュ・スコアリングカテゴリーは初心者でも査定を行えるという利点はあるものの、やはりコラージュ作品を読み取るためには作品の印象というものが大事であり、そこについては限界があると思われた。

（2）箱庭作品の評定に関する研究成果

方法

1）調査目的

岡田(1969)の箱庭印象評定尺度(SD 法)を用いて、箱庭療法の実践経験のある臨床心理士 9 名と箱庭療法の実践経験のない初心者 31 名に児童養護施設入所児の箱庭 120 作品の評定を行ってもらい、被虐待児箱庭作品の評定の相互性について検討する。

2）評定者

a 初心者群：箱庭を体験したことがない大学 2, 3 年生 31 名

b 経験者群：箱庭を自らも体験し、3 ケース以上実践したことがある臨床心理士 9 名

手続き及び分析方法

1）箱庭印象評定分析

岡田(1969)の印象評定尺度を用いて、4 つの尺度(統合性、充実性、柔軟性、力量性)と

性別、年齢(小学生、中学生、高校生)、入所年齢(乳幼児期入所、児童期入所、思春期入所)、在園年数(0～3年、4～7年、8年以上)、箱庭体験(0回、1～5回、6回以上)、砂の使用の有無(砂を触らずに玩具を置いたものを無、砂を使って川や池を掘ったりしたものを有)との関係について、初心者群と経験者群との比較検討を行った。また、評定者間での比較を二元配置の分散分析を行い検討した。

2）評定値の一致度の分析と使用玩具の傾向

初心者群と経験者群の評価の一致度を見るために、ケンドールの一致係数の検定を行った。さらに、作品の印象評価をするうえで、得点の高低では、どのような玩具が多く用いられているのかを検討した。

結果

箱庭印象評定の特徴

1）性差

初心者群、経験者群共に男子が女子より「充実性」「力量性」のある作品を作り、女子が「柔軟性」のある作品を作ると評価した。統合性には有意な差は見られなかった。

2）年齢別特徴

箱庭印象評定得点を年齢別で比較すると、初心者群は「統合性」と「柔軟性」において主効果がみられた。また、多重比較で年齢差を見ると初心者群は、高校生が小学生よりも「統合性」「柔軟性」のある作品を作ると評価した。経験者群においては、「統合性」「力量性」において主効果がみられた。多重比較で年齢差を見ると、「力量性」においては、小学生作品に、中学生、高校生より「力量性」があると評価した。また箱庭作品の明暗については評価が難しいことが言えた。「力量性」の下位項目については、作品の深さや大きさに関して、年齢差による評価が難しいことが言えた。

3）入所年齢別特徴

各カテゴリー、下位項目において有意な差は認められなかった。

4) 在園年数による特徴

在園年数別で比較すると、初心者群、経験者群とも有意な差は認められなかった。

5) 箱庭体験

箱庭体験別でみると、初心者群では、下位項目においても差は見られなかった。経験者群においては、「柔軟性」において、1~5回箱庭を作ったことがある児童の方が、柔軟性があると評価した。

6) 砂の使用

砂を扱って作品を作った児童(有)と砂を扱わず作品を作った児童(無)の作品を見ると、両群とも有意な差は見られなかった。しかし下位項目で比較すると、「柔軟性」下位項目である「かたい 柔らかい」「こせこせした のびのびした」の項目でそれぞれ有意な差がみられ、砂の使用がある児童の作品が初心者群でも柔らかさやのびのびした様子を感じ取られる評価をした。

一致基準と一致の割合

1) 初心者群の評定の一致率

各群において一致の割合をみるため、² 検定を行った。「統合性」、「充実性」、「柔軟性」とでは、一致度数が異なることが分かった。また、中程度の一致の割合が高かった。

2) 経験者群の評定の一致率

「統合性」、「充実性」、「力動性」、「柔軟性」の全てにおいて一致度数が異なることが分かった。また、「統合性」と「充実性」は中程度の一致の割合が高く、かなりの一致の割合も見られた。しかし、「力量性」と「柔軟性」においては、低い一致の割合が高く、経験者群の「力量性」と「柔軟性」の評定には一致がみられず評定に幅がみられた。

まとめ

1) 初心者群の評定の一致度

「統合性」「充実性」「柔軟性」においては、中程度の一致の割合が多く、ある程度の一致はみられるが、初心者群は「どちらでもない」や偏った評価の得点等も予測される。「力量

性」の一致率は低く、見方にもばらつきがあり、捉え方が難しいと思われる。

2) 経験者群の評定の一致度

「統合性」と「充実性」においては、一致率が高かった。しかし「力量性」と「柔軟性」においては、一致率が低く、評定者によって評価基準が異なることが示唆された。しかし、経験者群は、箱庭の臨床経験を積むほど箱庭作品に対する見方や感じ方が熟練され、初心者群との評価の仕方や次元の一致度に差が出ると思われる。

まとめと今後の課題

初心者群と経験者群では、「作品の見方」において、性差と年齢差は一致する部分は多いが、入所年齢、在園年数、箱庭体験、砂の使用に関しては、初心者群の方が捉えにくい部分が多く、経験者群との違いがみられた。また、初心者群と経験者群では「柔軟性」の見方に差があり、経験者群はより柔軟性の見方に幅があり作品を見る視点や着目点の違いがみられ、臨床経験の差や感じ方の差による影響が推測された。しかし、今回の研究結果において、初心者群だけでなく経験者群内でも、評価にばらつきがみられ箱庭体験による見方の違いもあると思われた。今後、評価者が作品の何を見て評価を行っているのかなど評価における着目点の研究も必要と思われた。今後の課題として、経験者群の評定の一致率が高い作品を抽出したうえで、初心者群に評定してもらい、評価者による見方の違いについて比較検討すること、初心者群と経験者群は、どこに着目しながら作品を見ているのかなど着目パターンの比較検討を行うことで「箱庭作品の見方」の研究が深まると考えられる。

(3) 本研究の位置付け及び今後の展望

心理療法は、言葉を介するコミュニケーションが本質とされるが、被虐待児は、自分の心の中に刻まれた記憶をうまく表現することができず、そのため、表現を促す方

法が求められる。箱庭療法、コラージュ療法の特徴をふまえての評価に関する基礎的研究や臨床的研究は、自分の気持ちを十分に表現することが乏しい被虐待児の理解と支援のためにも重要と考える。

上記のような箱庭療法、コラージュ療法の特徴をふまえ、本研究の特色の1つとして、箱庭作品においては、箱庭印象評定尺度を用いて、箱庭療法実践者と箱庭療法初心者による評価特徴を明らかにし、箱庭療法実践者と箱庭療法初心者における「箱庭の見方」の相互性について検討した。コラージュ作品においては、山上(2010)が簡便で客観的に体系化された解釈基準の必要性からハンドテストの評価システムをコラージュ作品に適用した「コラージュ・スコアリングカテゴリー」を作成し初心者でも可能なコラージュ作品の査定の試みを行っている。しかし、印象評定尺度や判断軸との関係については論じておらず、コラージュ作品の査定に関する合理性に関しては十分に確立されていない。コラージュ制作が治療的要素のみではなくアセスメントとしての機能も果たすことが出来るよう、評価方法の確立も重要である。そこで、コラージュ印象評定尺度、判断軸を用いてコラージュ療法実践者からの印象内容の特徴を把握し、さらにコラージュ・スコアリングカテゴリーを用いた初心者からの評価内容の特徴を明らかにして、コラージュ作品の査定に関する合理性について検討を行った。2つ目の特色として、箱庭療法、コラージュ療法を継続的に実施し、児童養護施設での臨床的効果をより確実なものとして「評価」を用いた実証を行った。以上の研究より、児童養護施設での臨床的効果をより確実なものにするためには、事例に取り組みながら評価を用いて実証していくことが重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

西村喜文 被虐待児のコラージュ表現の特徴(1) - 形式・内容分析から -
日本コラージュ療法学研究6巻1号 p15-26
2015年8月 査読有

西村喜文 被虐待児のコラージュ表現の特徴(2) - 印象評定を用いた集計調査 -
日本コラージュ療法学研究6巻1号 p27-38
2015年8月 査読有

〔学会発表〕(計5件)

西村喜文 「児童養護施設におけるコラージュ療法 - 女子高校生のコラージュ表現 -」 日本心理臨床学会第35回大会秋季大会口頭発表 2016年9月4日~7日
パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

西村喜文 「コラージュ作品の査定に関する提案第3報」日本心理臨床学会第35回大会秋季大会自主シンポジウム企画提案者 2016年9月4日~7日
パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

西村喜文 「コラージュ療法の可能性」国際心理学会議シンポジウム話題提供者 2016年7月24日~29日
パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

西村喜文 「コラージュ作品の査定に関する提案第2報」日本心理臨床学会第34回大会秋季大会自主シンポジウム企画提案者 2015年9月18日~20日
神戸国際会議場(兵庫県神戸市)

西村喜文 「コラージュ作品の査定に関する提案第1報」日本心理臨床学会第33回大会秋季大会自主シンポジウム企画提案者 2014年8月23日~26日
パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

〔図書〕(計1件)

西村喜文 「コラージュ療法の可能性 - 乳幼児から思春期までの発達的特徴と臨床的研究 -」創元社 2015年9月、240

6. 研究組織

(1)研究代表者

西村 喜文 (NISHIMURA YOSHIFUMI)
西九州大学・子ども学部・教授
研究者番号：40341549

(2)連携研究者

森谷 寛之 (MORITANI HIROYUKI)
京都文教大学・臨床心理学部・教授
研究者番号：60131257